HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	技術論における「労働」把握の特徴とその必然性
Author(s)	上原, 慎一
Citation	社会教育研究, 11, 105-118
Issue Date	1991-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28485
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P105-118.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

技術論における「労働」把握の特徴とその必然性

上　原　慎　一

1．は　じ　め　に

本稿の課題は，現代の技術論における生産力と労働の関係（すなわちＭＥ化のもとでの労働の把握）に関する研究の意義と限界を，その由来にさかのぼって考察することにある。これはすでに拙稿[1]でおこなった問題提起を必然性において把握しようとするものである。その問題提起とは以下のようなものであった。

(1)　現代の技術革新下における「労働」把握は三つの態度に分けられること。

(2)　第一の態度としてあげられるのは，機械体系自体，ＭＥ機械の技術的特性から労働・熟練に与えた影響をストレートに導くという傾向を持つ研究である。これは技術論の研究に多い。

(3)　第二の態度としてあげられるのは，「労働の二極分化」などの分業の形態を重視する見解である。この場合の分業観は，圧倒的に，テーラー主義との関連，「構想と実行の分離」，「精神労働と肉体労働の分離」の一般化に基礎をおいているものが多い。これは批判的経営学の一分野である労務管理論の研究者と労働問題の研究者に多い。

(4)　第三の態度としてあげられるのは「労働のグレードアップ」説を基調とした，労働者の技能が技術革新によって高度化する傾向にあるという説である。これも労働問題の研究の最近の傾向である。これとは対照的な由来を持つ「労働の社会化」論も，「労働の社会化」によって労働者の社会的な諸能力が発展することを主張することにおいて，この領域に属する。

このような問題提起はそれぞれの研究の主観的な「意図」とは食い違うとしても「労働」の扱われ方それ自身としては妥当する。そして，それぞれは現代の労働の実態のそれぞれを一面的ではありながら浮き彫りにしたものと評価することもできる。しかし，それはあくまでも一面においてであり，総体的な問題把握ではない。このように，問題設定を一面化することは，その問題の「本質」に到達することを容易にしたが，他方で実践的問題関心（実践者のそれのみではなく，研究者のそれをも含む）と理論的問題設定を分離することを必然的にした。私は，この分離がそれぞれの局面で労働者の様々な要求や悩みを研究の対象としない（できない）ことを導いたと考えている。それに対して，拙稿における問題提起も，それではなぜそれぞれの研究分野においてそのような把握にならざるをえなかったか，先の分離が，それぞれの研究に対してどのようなデメリットを与えたかという点に関しては具体性を欠くものであった。

本稿では，それをふまえて，まず技術論における「課題の設定の仕方と特徴」に焦点をあてるこ

とによって，これまでの研究の意義と限界を正確に把握することを目標とする(2)。

2．「唯研論争」とその問題提起

「唯物論研究会」において戸坂潤，永田広志，相川春喜，岡邦男らを中心に戦前に展開された技術論にかんする論争（以下これを「唯研論争」と呼ぶ。なお，この「唯研論争」に関しては論争参加者の敬称は略する。）は，その当初時代的な問題関心，すなわち戦争のための生産拡充，「科学ブーム」もあって，生産力分析に限らず多様な問題意識でスタートした。この点に関する時代の雰囲気を十分に表現している証言を少し長いが引用してみよう。

「この四年程以来，全世界を通じて極度に発達した資本主義が，決定的な不況という相貌を通じて，ありと凡ゆる形の危機――経済的危機・政治的危機・文化危機・其の他――を凡ゆる人々の眼の前にありありと展げて見せている。資本主義は今や……危機に当面している。金融ブルジョアジーとその代弁者たちは，この危機の本質をば経済的危機として解決することが到底出来ないことを遂に悟ったので……特にこれを文化危機という形態に於て捉えることを企て，これをそういう風にイデオロギー化することによって何とか解決の道を見出そうと試みる。……（中略）……――併し，欧州文明や，物質文明という資本主義文化のこの片言まじりの特色づけも亦，必ず技術という概念に結び付けられている点に注目しなければならない。資本主義的文化が元来技術と結び付いているものだと前に云ったが，それは同時に，技術が資本制なる経済組織・生産関係と根本的に結び付いていなければならぬということだったのである。処が彼等によればそれが，単に欧州文明に，単に物質文明に，即ち単に文化問題だけに結び付けられて理解されている。これが，彼等のやり口の特色なのである。即ち，技術はこの際，イデオロギッシュに（観念的に）しか取り上げられていない。」(3)

この戸坂の指摘は，今日でも魅力を失わない叙述であろう。このことから技術論には資本主義の危機の問題とそれに対応したイデオロギー問題，社会的な意識形態の問題及び，それに対する批判――ここから技術の規定が問題にされるにいたる――等が問題関心・問題設定の基礎にあったことがわかるであろう。その証拠に戸坂が技術論を展開した後，「常識」の問題，「日本イデオロギー」の問題へと研究対象を展開させていったということは周知のことに属する。そして，その問題関心の前提として，戸坂，岡等は「客観的」に存在する技術（または，物質的技術）と「主観的」に存在する技術（または，知能・熟練などの能力）の考察を行なった。そこでは，専門的知識を要するものと労働力の技能の位置付けは揺らいでいたという問題をもってはいた。また，一見「主観」と「客観」をまったく分離するもののように見える。しかし，そうではない。彼等は常にそれらの対応関係がいかにあるのかということに焦点をあてていたのである。また，理論的な問題でも歴史上の生産力における労働力，労働組織の位置付けは重要な論点であった。事実，小高良雄（鈴木安蔵），岡らにとっては労働の組織・編成の歴史上の地位の変化の問題について議論していた(4)。

このような差当っては「広い」問題関心は，技術者の問題や技術教育の問題，農村工業の実態の問題――労働力の質とその形成の問題に関連する――へと広がりを持つ可能性をもっていた。それなのに，なぜ，永田，相川の提起による技術の規定＝「労働手段の体系」へと収斂させざるをえなかったのだろうか。

そのことへの回答は直接には『資本論』の解釈にあり，その根拠には彼等の理論的な傾向の特徴にある。

「技術は一の歴史的範疇である。社会の生産力の一要素たる技術は，それと一定の歴史的経済的条件から離れて考察してはならぬ。」(5)

「我々は，技術を，『労働手段の体制』(Organisation des Arbeitsmittel) と，マルクスに従って，規定する。」(6)

「人間社会が，その一定の発展段階に於いて，生産的労働のために用ひる労働手段の体制を，我々は技術と名付けるのである。従って，技術は，生産過程において，人間的労働力に対立する，対象的，乃至，客観的要因である。それは，人間の意識するとしないとに関わりのない，実在（ザイン）の形態で発展する。」(7)

この規定の根拠にあるマルクスの叙述を上げてみよう。

「労働手段は，労働力の発達の測度器であるだけではなく，労働がそのなかで行なわれる社会的関係の表示器でもある。」(8)

「生産様式の変革は，マニュファクチュアでは労働力を出発点とし，大工業では労働手段を出発点とする。」(9)

「社会的人間の生産的諸器官の形成史，それぞれの特殊な社会組織の物質的基礎の形成史も，同じ注意に値するのではないか？……技術学は，自然に対する人間の能動的な態度をあらわに示しており，人間の生活の，したがってまた，人間の社会的生活関係やそこから生ずる精神的諸観念の直接的生産過程をあらわに示している。」(10)

「いっさいの生産用具のうちで，最大の生産力は，革命的階級そのものである。」(11)

以上のマルクスの叙述からは主観的（主体的）なものと客観的なものに分けるという論理はみられない。また，この時期の相川は「生産的労働はがなされるためには……『労働の火』の中に結合されなければならない。……具体的な，統一的把握を前提としてのみ，個々の要素の分析，概念の差別がなされる」(12)という生産力の総体を意識した指摘をしている。しかしこのような，技術の規定から主観的な，または，労働力のモメントに属することを排除していくという理論的な傾向は執拗な反論(13)にもかかわらず，唯研論争をリードしていく。例えば永田はそれらの議論を批判して以下のように言う。

「歴史的範疇として捉へられる生産力は，種々の歴史的時代において種々の独自な質的規定を持つ。然るに生産力の個々の要素――生産手段と労働力――を互いに切離して表象するならば，生

産力の歴史性は理解されない。」(14)

「資本主義下における労働者の窮状は……技術の利用の社会的条件 —— 生産様式 —— の特質によるのである。」(15)

「技術の資本主義的応用は生産過程を多くの細分化された単調な部分労働に還元することによって労働者の技能の役割を引下げ，非熟練労働者や婦人や未成年者を低賃金で雇用し，かくて『労働者の我儘』を抑へつけ，技術を労働者の窮乏化の条件たらしめる。……その説明に当って『技術の所属移行』について語っているのは不正確である。……労働手段の進歩が労働力をますます『代補する』ということは，本来労働力に属している技術的要素がますます対象化されるということではない。それは一般に労働の生産性が高まるということである。」(16)

これはいったいどのように理解すれば良いのであろうか。ここでは，「生産様式」「労働者の窮乏化」「労働の生産性の高まり」など，批判としては焦点の定まらない，分析のレベルを異にしたマルクスの叙述が援用されている。また，我々が経験的に見ることのできる機械化は決して「代補」を否定してはいない（「代補」でない場合も多いが)。「労働者の窮乏化」も資本蓄積論のレベルでいっているのか分業論のレベルでいっているのかも判然としない。後者ならば，永田自身の証言からも技術の規定から労働力のモメントを放逐すべきでなかったことは明らかであろう。このような「生産様式」に関する抽象的理解によって，永田は労働力の役割について以下のように述べざるを得なくなるのである。

「労働者自身の発意によって無償でする時間外労働，労働奉仕という意味の土曜労働は，突撃隊や社会主義的競争の形態で広汎に広まった労働規律の端初であった。このような労働規律によって労働生産性が高まったとき，初めて技術の問題が解決され得る可能性が造り出された。」(17)

以上からこの理論の特徴は，技術（＝労働手段の体系）と労働力（＝最大の生産力）を分離するというところにあることがわかるであろう。その場合，その結合様式は抽象的な生産様式(＝体制)に還元され，具体的に問題になっていないのである。

ともあれ，永田によってこのように宣言されてから，実は技術論はその課題を，決して生産力分析ではない諸々の実証研究，および大河内正敏らの科学主義工業の批判などのイデオロギー批判に展開していく基礎を与えられたのである。

この過程を見ればわかるように当初の問題意識から一回技術の規定にかかわる論争を経て，純化した形でイデオロギー批判へ回帰したことがわかる。これは一見研究の発展のように見えるがそうではなく，他の生産力の諸モメントを捨象するということによって自らの研究の根拠を喪失していく過程であったと総括することができる。自らの研究の根拠を現実に置けなくなっていたこと，そうせざるを得なかった理論的傾向（ひらすらそれは純化へと向かっていく）が，突如「現実」とぶつかることによって，容易に「転向」するにいたった(18)ということは現在の転向研究においては周知のことに属するであろう。

それにしても，なぜ，労働力のモメント，労働手段と労働力の結合様式に属する事柄が「主観的」として，技術論の研究から放逐されなければならなかったのであろうか。しかもこれは，戸坂も言うとおり，社会的な水準（あるいは標準）のもとでの技能は，それが「水準」をなしているかぎり社会的に「客観的」にあるものであろう。この問題は，直接的には彼等の議論があくまでも労働過程の三契機――労働力・労働手段・労働対象――の関連のみを対象としていたことに由来している。しかし，それに対しても次のような疑問は依然消えない。労働力の具体的編成様式とそれと労働手段との結合の関係はなぜ問題にならないのか，と。この疑問に対して「労働力のモメントが問題にならないのだから，その編成様式・結合様式は問題にされようがない」とこたえるのは問題意識のねじれといわざるをえない。というのは体系説は，基本的には，絶対的剰余価値生産のレベル――すなわち，そこに「労働手段の体系」さえありさえすれば生産過程は必然的に「社会的水準」のもとで機能する――という観点に基礎を置いたものである。しかし，絶対的剰余価値論は，生産手段に対する排他的な所有権を基礎にした資本の労働力の搾取に対する絶対的な権力関係でもって（ゆえにそれには労働日に関する階級闘争が対置される）規定されているのであって，それゆえ労働力の労働の具体的なあり方に対しても，絶対的な命令―服従関係として考察されてよいわけである。それはそれとして，現代社会に存在しないというわけではない。しかし，ひとたび，そのような権力関係が支配的になれば，それからは資本が創造し，資本の生産力として現われる労働力の結合形態としての「労働の社会的生産力」（「協業」およびその特殊形態としての分業のあり方）が，逆に決定的な問題となるのである(19)。この点を「唯研論争」は看過していたのである。また，そうであったからこそ，先に引用したマルクスの叙述を論理レベル（『資本論』の第5章と第12，13章を無媒介に接続していることに注意）に関わりなく引用することもできたのであろう。そして，そうならざるをえなかった最大の理由には，生産過程そのもののうちに資本の果たす役割を認めないという生産様式と労働手段の関係に関する理解の不徹底性にあるのである。このことから，技術論が，生産力分析とは相対的に独立に研究されることができたのである。

もっとも，このような展開は，当時の状況からして止むを得ないという側面もある。というのは，当時の資本による労働支配は労働への形態的包摂を基礎とする絶対的剰余価値生産が主流であり，資本による労働力養成や年功的秩序を基礎とする「半熟練」化（＝労働の実質的包摂の展開）は，まだまだ萌芽的であったのである(20)。それ故，戸坂も，具体的に考察する場合，技術者論として考察せざるをえなかったのである。このような時代的制約が考慮されず，それを「資本主義的生産様式一般」の原則，「真理」にしてしまったとき，理論は力を失っていったのである。

3．戦後論争の特徴

戦後の技術論は周知の通り戦前の伝統をひく「体系説」と武谷三男氏の唱導による「適用説」の

論争で幕をあけた。両者の理論は，通説に言うように真っ向から対立していたように見えるが実は同様の問題を共有していた。それは，現実の技術の分析に当ってまず，労働手段と労働力が分離され，その間をうめるべき「生産関係」，あるいは「生産様式」は資本主義的生産様式という名のもとに所与のものとされたため，労働手段の体系あるいは科学水準がストレートに労働のあり方を規制するというような問題設定に滑りこんでいったということである。以下，星野芳郎氏と笹川儀三郎氏の論争と芝田進午氏に対する中村静治氏の批判を題材にこの点を確認する。というのは星野氏と芝田氏は労働過程の二重性を提起した点で――理論的にはかなり誤りを含んでいるが――新しい議論を切り開く可能性をもっていたからである。ゆえに，それに対する批判のあり方は従来の枠組みがどうして変らなかったのかを示すと思われるからである。

(1)　星野氏に対する笹川氏の批判

戦後熾烈に展開された適用説と体系説のあいだの論争は適用説の論理（学）的妥当性，史的唯物論の解釈の問題等原理的な問題に関する議論を経て，次第に具体化していった。そして，適用説を技術史や史的唯物論との関連で理論的に基礎付けていったのが星野氏であった。星野氏の理論的特徴は以下のようなものである。

「労働過程はたんなる自然的過程ではない。それは同時に自然の法則につらぬかれ，自然的過程と同一でありながらも，しかもまた自然の法則を駆使するという，真の人間的な技術過程でもある。労働過程はこの瞬間にして，たんなる自然的過程であることをやめ，自然の法則のみが問題になっているとはしても，社会のもっとも基礎的な過程となるのであり，ここにおいてはじめて社会的人間関係によって制約される論理的基礎を与えられる。」(21)

この点から，労働過程は「本能的，反射的な，エネルギー代謝の過程」である「自然過程」と「それ自体としては，エネルギー的なものは，一分子もふくまない」「技術過程」に分けられる。

「人間は，決して孤立した存在ではない。人間はその当初から，『他人のための彼の存在ならびに彼のための他人の存在』であり，自然に働きかける人間の労働は，まず，自分が食うための，自分の生活の再生産のための労働であるが，それはまた他人の再生産のための労働である。」(22)

「人間の労働は，その目的においても手段においても，常にまず基本的に，人間と自然との矛盾から規定されるが，それはまだ可能的なものにとどまり，現実には，社会的人間関係の矛盾によって終局的に規定され，それを媒介にして実現される。……自然力が，生産力として発揮されるには，生産関係を媒介としなければ不可能であり，生産力は実現し成立することができない。」(23)

生産力は，生産関係を媒介にしなければ現実のものにならないという点は，抽象的ではあるが，さしあたりよいとしよう。ここで，その論理的基礎になっているのは労働過程の「二重性」である。この「二重性」論は以下に述べる問題をもっているが，目的論の導入によって，労働過程における労働の主体性の位置を明確にし，社会関係を労働そのもののなかに展望しようという積極面をもっ

ていた。しかし，この労働過程の「二重性」論は労働を自然から切り離すという問題点をもっていた。そして，氏は技術過程をその目的論的性格によって「他人のための彼の存在ならびに彼のための他人の存在」＝社会，そして生産関係と接続するのである。この展開は「技術を進歩させる主体」を運動論的に導くことを可能にしたが，氏のいう生産関係からは，具体的な「労働の社会的生産力」が導かれる可能性はなくなった。このように展開してしまっては，わざわざ「二重性」論を導入した積極性は無に帰してしまう。「労働過程論」における「生産関係」は生産手段の排他的所有にもとづく資本家と賃労働者の関係であり，それ以外は問題にならない。生産関係が生産力の契機として機能するのは，資本が「協業」を組織することによって独自の――集団に固有の――生産力を発揮させるからである。このレベルの議論に対しても星野氏は「機械も，技術者も，労働過程にあっては，同じように，一つの技術的存在」であると論理を不当に拡張することによって，技術者や労働者の働く労働過程を，「客観的法則の意識的適用」によっていかにでも変更が可能であることを導いたのである。

星野氏を批判して笹川儀三郎氏はつぎのようにいう。

「星野氏のように，意識の有無，ないし，その質的な区別から出発して，人間労働の運動形態の質的特殊性を基礎付けようとするのは誤りである。……意識の質的な区別から人間労働の運動形態を基礎付けようとするならば，それは，当然，一面的，抽象的な把握に終わらざるをえない」(24)

これは，自然的なものを生物的なものと等置してしまい，人間に固有の自然的なものを見ない星野氏の論理に対しては有効な批判である。

「星野氏の強調される目的的意識的過程とは……客観的運動形態の一モメントである意識過程をこの運動形態の特殊的質にすりかえられようとしたものに他ならない。」(25)

笹川氏のモティーフであるこの批判は星野氏の主張の積極面を見ていないといわなければならない。たしかに，星野氏の主張は混乱している。しかし，労働のなかに社会的なものを位置付けようとするのは正当な問題意識である。これを評価できない笹川氏は，社会的なものを生産関係と抽象的に把握せざるをえないのである。

「この主張（『他人のための彼の存在ならびに彼のための他人の存在』――引用者）のうちには，ブルジョア的人間，すなわち，個人を絶対視するとともに，他方，他人を相互に手段視する，市民社会における人間が表象されているのを見逃すわけには行かない。社会においてのみ個別化する人間の存在が，逆に，個別化された人間から出発してとらえられている。」(26)

「星野氏のいわれる『社会的人間関係』に対応し，そこに表象されているものは，社会的生産における分業関係，社会的分業である。」(27)

「星野氏にあっては，生産力と生産関係の矛盾は，巧みに主観化された生産力（労働の目的意識的過程）と主観化された生産関係（社会的人間関係）との矛盾にすり替えられている。」(28)

ここでも笹川氏による批判は妥当する。星野氏は，生産関係を分配関係ととらえることによって

生産関係の具体的なあり方の把握に成功していない。そこでは，資本の目的のみが問題とされる。しかし，生産関係が具体的に考えられていないのは両者が共有すべき問題であることに笹川氏は気付いていないのである。星野氏の理論は，技術過程を自然から分離することによって，客観的法則と社会的なものをそこに詰め込んだところに成り立ったのである。だから，笹川氏は労働の目的と社会関係の成立する論理レベルの相違を具体的に論証することをなすべきであったのである。

以上から，適用説は科学技術の意識的適用は自然科学のそれにとどまらない，社会的――特に労働における社会関係それ自体の客観的法則性――を含まなければ問題にならないことがわかるであろう。それは，彼等自身の論理の矛盾が示していた。しかし彼等はそれを変更しようとはしなかった。

体系説は鉄鋼，化学などの重化学工業の展開とアメリカ式労務管理の手法の導入によって妥当する局面を迎えた。それは，テーラー式作業管理に規定され，労働者相互が競争的にふるまわざるをえない枠組みを未だ示していなかったから，当然，労働者（力）の主体性などは問題にならなかった。それでも同じ体系のもとでの生産力の差は十分に存在し得ることに対しては無関心であった。

(2)　芝田批判の意義と問題点

ここでは，芝田進午氏の理論的特徴とそれにたいする中村静治氏の批判を取り上げてみたい。というのは芝田氏も，星野氏同様，理論的には科学の直接的生産力化，それにともなう価値法則の止揚，普遍的労働の過大視等，様々な問題点を持ち，それはまた様々な論者から批判されたが，それでも労働過程の二重性の提起と氏独自の生産様式の把握はかなり重要な問題提起を含んでいるからである。

まず，芝田氏の労働過程の二重性の把握を見てみよう。

「労働過程とは，労働が，創造的活動を行なっている瞬間に観察された労働そのものであって，労働過程には『人間による自然の加工』ならびに『人間による人間の加工』という二つの側面が区別される。前者が労働の技術的過程であり，後者は労働の組織的過程と規定されうる。」(29)

「労働過程は，労働手段と規則の全体系のうちに先行する世代の生産上の経験が蓄積されているという意味で組織的過程であるだけでなく，労働手段の使用が労働組織によって媒介されなくては行なわれないという意味でも組織的過程である。一般に，労働の組織的過程は協業と分業の矛盾を通じて発展するが，この場合，労働手段の多様化と集中化の発展が，分業と協業の発展を規定し，ついで分業と協業の発展が労働手段の多様化と集中化を促進し，労働の技術的過程と組織的過程は相互に前提し，媒介しあう。」(30)

ここで規定される労働の組織的過程はさしあたり，単純な労働過程のレベルで論定されているのか，社会的労働過程のレベルで論定されているのかはわかりずらい。後者とするならば，芝田氏のこの規定はいくぶん機械的・抽象的な傾向を持つが正当な論理である。また，協業を構成する労働

者が「平均的労働者」(31)であるという指摘をのぞけば，さしたる誤りもない。

「これまでの多くの労働過程論の欠陥は……『単純な労働過程』と社会的生産過程を混同ないし，同一視し，前者のみが『労働過程』のすべてであるかのように錯覚した点にある。」(32)

この指摘もまた正当である。

「人間の自然に対する支配力，すなわち生産力は，労働の技術と組織の統一を媒介としてのみ実現するが，この統一の様式，すなわち生産諸力の結合の内的構造が，生産様式あるいは労働様式であって，この生産様式に照応して，生産諸関係，すなわち生産手段の所有諸関係，したがってまた生産手段の分配関係がとり結ばれる。」(33)

ここには生産関係を生産手段の所有関係と等置するという重大な問題がある。これは，氏が生産力を単に「人間の自然に対する支配力」としてとらえ，「資本の生産力」という側面が正当に評価されないことから，生産様式・労働様式そのもののなかで資本が果たす役割を軽視することになるのである。しかし，「生産諸力の結合構造」から，生産様式・労働様式を導出するのは卓見である。これは，労働力の編成及びそれと労働手段との結合に大きく目を向かせる論理であった。

しかし，芝田氏のこの「二重性」論は中村氏の猛反発を受けることになる。

「……ここでの『社会的組織』は資本主義のもとでのそれであって『人間生活のすべての社会形態に等しく共通した』『労働過程』のもとでの組織でないのはだれの目にも明らかである。」(34)

「……芝田の『組織的過程』とは分業と協業のことである。そして，だれでも知っているように『資本論』第一巻第三篇第五章の労働過程では，分業や協業は問題とされていない。『資本論』では協業，分業は労働一般の次元ではなく，相対的剰余価値生産の方法として，協業，分業とマニュファクチュア，そして機械と大工業という〝三段階〟のなかでとらえられている。」(35)

中村氏による芝田氏への批判は「二重性」論を労働過程論レベルで措定していると仮定したうえでのものである。もし芝田氏の論理がそうなっているのならば正しい批判であろう。しかし，その点についての芝田氏の叙述はあいまいであり断定はできない。論理そのものの混乱を指摘するのはもちろん必要な作業である。しかし，芝田氏が，「組織的過程」を導入したことの積極性は正当に評価されているとは言いがたい。

「ある一定の生産様式が一定の生産関係として，また特殊な労働様式として現われるのは，生産様式が生産諸力の生産諸関係内部における運動形態であるがゆえである。ということは，生産関係は生産力の社会的形式だということである。」(36)

「(マルクスにおいては――引用者)生産様式という語は，つねに労働手段の性格を核とした術語として駆使されているが，一般に，たんに労働様式という場合，それは具体的有用労働の仕方をさしている。」(37)

「マルクスにあっては生産関係とは，たんなる物質財貨の生産関係ではなく，物質的生活の生産において諸個人が互いに結ぶ社会関係である……物質的生産に限ってみれば，この過程を支配する，

つまりその経済的合理性を決定するような社会関係である。主な決定，支配項目をあげてみてば，だれが労働し，だれが労働しないか，入手可能範囲内のことであるがいかなる労働手段をどれだけどのように利用するか，いかなる労働者――熟練工を使うか，女子の未熟練労働者を使うかなど――を使用するか，生産物の領有，分配形態などである。」(38)

以上は，中村氏による土台から生産力を排除する「通説」の批判である。現在では，これに対する異論はさほどないと思われる。しかし，ここで指摘されている労働様式－具体的有用労働は非常に抽象的である。念頭に置かれているのは，個々の労働かあるいは抽象的な総体の労働のみであって，その組織に固有の生産力はまったく考慮されてはいない。この労働把握のゆえに以下のような現代の生産過程の把握になるのである。

「ＦＭＳ……と呼ばれる自動搬送装置つき群制御システムの場合，複数のＮＣ工作機械を主体とする工作機械群が自動工作物の搬送装置と有機的に連結され，電子計算器によって制御されている。工場全体がコントロール・センターで監視，制御され，トラブルが生じた時だけ現場にゆけば良い仕組みである。機械の傍らから姿を消した労働者に変って現われているのが，システムの設計労働やプログラミングの作業に従事する言われるソフトウエア労働者である。」(39)

「労働手段としてのオートメーション，例えばロボットやＮＣ工作機械の場合，以前に労働者が機械に対して行なっていたと同じ作業を自己の機構でおこなうのである。すなわち，原動機，作業機，伝導機構という三要素に第四の要素として記憶，選択，計算，情報処理などの機能を持つ電子制御機構が加わり，自らの運動と原料の不正常を検知し，自己修正するのである。したがって，機械の段階ではどれほど自動化が進んでも多かれ少なかれ必要とした運転，監視，調整などの労働は原則として不要となる。」(40)

事実は中村氏の予想と異なって，直接的生産過程からの労働者の排除をそれほどドラスティックにはすすめていない。合理化によって，要員削減は不断に追求されてはいるが，それは，労働手段の性格からは相対的に別の要因が働いているのである。また，ＮＣ工作機械の導入によって熟練が必要とされる機会も消失はしていない。個別的な労働の重要性は減少してはいるが，それに変って組織的な労働のあり方が重要になってきている場合もあるのである。ともあれ，技術論における労働の具体的有り様を追求するという作業は決定的に遅れているのである。項を改めてそれを見てみよう。

４．現在の「ＭＥ化にともなう労働の変化」の把握の理論的特徴

現在の技術論における生産力構造の把握はＭＥ化の影響をどのようにとらえるかを中心に行なわれている。そこではかつてのような，原理的問題提起はなされていない。また，適用説の論者も影をひそめている。そして，かつての論理構造は基本的に克服されぬまま現在にいたっている。そこ

で行なわれるのは労働手段の技術的特性から，直接に労働のあり方を類推することである。

例えば，馬場政孝氏は次のように言う。

「ＮＣ機械では，一般に金属素材の切削加工において人間の介添えを必要とせず，機械が自動的に行なう。被加工物の形状やその加工順序，工具の種類などはすべて符号化され……論理装置によって読み取られ，……パルス列になって送り出される。このパルス列によってサーボ機構が動かされ，それと結合した工具の動きを実現するのである。これは……人間の内在的な制御機能が技術として外化したものにほからない。」(41)

これで十分であろう。ここには人間労働を「集団」において把握するという観点はなく，「個別」の労働が機械とのアナロジーでとらえられ，そのまま労働手段に移し替えられていくと考えられているのだ。

こういった観点にささえられた直接的生産労働の軽視に対して，北村洋基氏は以下のように批判する。

「生産システムにおける不確実性要因，攪乱要因も，産業や企業の具体的な生産システムのよってその大きさや質的意味，また除去・克服の可能性はおおいに違うのは明らかである。……（中略）……いずれにせよＭＥ化・オートメ化がいかに進み，そして直接的生産過程の生産的労働が限りなく減少してゆくとしても，それは質的な意味での直接的生産労働の意義を無視してもよいことにはならないということは少なくとも確認できるであろう。」(42)

労働の位置を攪乱要因との関連でしか評価していないのには不満が残るが，参考にすべき意見ではある。しかし，氏のいう「直接的生産労働」は抽象性を脱していない。

山下幸男氏も次のように把握している。

「メカトロニクスを運転する労働では，

① 主たる労働は観念における作業，それに手における作業（入力）が付随する。労働の観念化。

② 労働の直接的協業化。ただしメカトロニクスが機械体系になっている場合。」(43)

山下氏の研究は，『資本論』理解 —— 特に労働のとらえかたに関する部分 —— の厳密さにおいてすぐれたものがあるが，そのとらえ方が，直接的にすぎる。それゆえＭＥ機械を操作するの労働に関しても入力作業以外は北村氏同様「メカトロニクスとしての完成度の未熟のため」(44)と一蹴されてしまう。そうではない，ＭＥ化は入力作業（氏においては観念における作業）の重要性を増大させるとともに，労働対象と直接それに接する部分（工具）の製作は決定的に重要になってくるのである。

それに対して，伊藤秀男氏のように課題を労働手段の技術的特性にのみ限定する研究(45)や，労働のあり方を柔軟性をもったものだとする青水司氏の研究(46)は説得性をもちそれなりに成功しているといえる。これは，課題を限定しているからである。技術論はいったい何を固有の研究対象としているのかということをより厳密に議論すべきであったのである。これは，もう一度技術の本質に

ついて議論すべきであるといっているのではない。元来，技術論は過大な課題設定と期待とを背負って言及するべきでない分野あるいは，言及するならば，そこの固有の論理を把握してから言及すべき分野に不用意に入りこみがちだったのである。

5．おわりに

以上，技術論の総括としては取り上げる論者に適正を欠いた観があるが，技術論に固有の「労働」観の成立のエポックを見てきた。この「労働」観は戦前の論争に由来をもっているが，当時からその克服の努力がなされなかったわけではない。しかし，その努力が十分な成果を上げられなかったのは，『資本論』の論理レベルの相違を十分に理解していなかったためであるという他はない。この責任は，戦後論争の当事者が負うべきであろう。技術論は「組織的過程」，労働の社会的生産力のもつ固有の生産力としての意義を無視し，「労働」を抽象的に扱ってきたがゆえに，媒介項となる諸契機――技術教育，管理技術教育，職業教育，労務管理・生産管理の問題等――が現代における生産力のモメントとしていかに機能しているかを正当に位置付けることができなかったのである。この媒介項を正当に位置付ける論理を設定したとき，技術論は生産過程の分析として重要な位置をしめることができるのである。

注記

(1) 拙稿「下請中小企業におけるＭＥ化の展開と労働の変化」北海道大学教育学部附属産業教育研究施設研究報告書『産業と教育』第9号，1991年3月，3～13ページ参照。

(2) 第二の態度（労務管理論など），第三の態度（労働の社会化論など）については別稿を期す。

(3) 戸坂潤「技術の問題」『戸坂潤全集』第一巻，勁草書房，1966年所収，232ページ。なお，以下傍点は著者のもので，下線は引用者のもの。以下，唯研論争については次のものを参照した。
『戸坂潤全集』（前出）
『唯物論研究』1～3，唯物論研究復刻刊行会，青木書店，1972～73年。なお『唯物論研究』の引用に際しては発行年に従う。
中村静治『技術論論争史　上・下』青木書店，1975年。
嶋啓『技術論論争』ミネルヴァ書房，1977年。

(4) 小高良雄「唯物史観における生産力の概念について」『唯物論研究』創刊号，1932年，および岡邦男「労働手段の体制と技術」『唯物論研究』第15号，1934年参照。また，中村静治氏もこの点に関して，「戦後の体系説に対する批判の原型をなしている」と評価している。同『技術論論争史　上』，17ページ。

(5) 相川春喜「技術及びテヒノロギーの概念」『唯物論研究』第8号，1933年，60ページ。

(6) 同上論文，61ページ。

(7) 同上論文，62ページ。

(8) K．マルクス『資本論』全集版，大月書店，1968年，236ページ。以下，日本語訳のページのみ示す。

(9) 同上書，485ページ。

(10) 同上書，487ページ。

(11) K．マルクス『哲学の貧困』高木祐一郎訳，国民文庫版，1954年，232ページ。

(12) 相川，前掲論文，61ページ。

(13) 例えば，戸坂は物質的技術のなかに主観的なものと客観的なものがあると反論している（戸坂「技術とイデオロギー」，前出『全集』所収）し，岡も労働手段に技術の息を吹き込むのはあくまでも労働力である（岡，前掲論文）としている。

(14) 永田広志「生産力の諸要素について」『唯物論研究』16号，1934年。49ページ。

(15) 同上論文，72ページ。

(16) 同上。

(17) 同上論文，65ページ。

(18) この点は唯研論争それ自体の性格の吟味と相川春喜の転向に即してより厳密に考察されなければならない。ともあれ転向したものが，少なからず「実践」を志向していたというのは紛れもない事実である。

(19) この点に関しては平子友長氏の問題提起が興味深い。同『社会主義と現代世界』青木書店，1991年，参照。しかし，氏の問題提起は絶対的剰余価値の生産と相対的剰余価値の生産の論理レベルの区別を重視せず，労働の形式的包摂と実質的包摂との区別のみを重視するという点(53～84ページ）で賛成できない。前者と後者の論理は厳密な対応関係にないのはもちろんだが，後者のみを重視すると現代日本の長時間労働に由来する労働問題の位置付けを行なえないからである。問題提起を行なうとしても氏が主張される「合理的経営」の内実を具体的に提起してからの方が生産的な議論になるものと思われる。また，久野国夫氏による人間労働力を生産力の主要因に置くという観点にも基本的に賛成だが，このような議論のレベルを考慮しなければ，再び虚しい論争を繰り返すだけになるだろう。同『現代資本主義の生産力構造』青木書店，1991年，参照。

(20) 隅谷三喜男編著『日本職業訓練発展史　下』，日本労働協会，1971年，兵藤釗『日本における労資関係の展開』，東京大学出版会，1971年参照。

(21) 星野芳郎「史的唯物論と技術論」季刊『理論』，第14号，1950年，47ページ。

(22) 同上。

(23) 同上。

(24) 笹川儀三郎「技術，労働過程，生産関係」『経営研究』(大阪市立大学)，第8号，1953年，66ページ。

(25) 同上論文，71ページ。

(26) 同上論文，75ページ。

(27) 同上論文，77ページ。

(28) 同上論文，84ページ。

(29) 芝田進午『人間性と人格の理論』，青木書店，1961年，63ページ。

(30) 同上書，73ページ。

(31) 同上書，192～193ページ。

(32) 同上書，74ページ。

(33) 同上書，80ページ。

(34) 中村静治『技術論論争史　下』，411ページ。

(35) 同上書，443ページ。

(36) 中村静治『生産様式の理論』，青木書店，1985年，32ページ

(37) 同上書，33ページ。

(38) 同上書，131ページ。

(39) 同上書，192ページ。

(40) 同上書，206～207ページ。

(41) 馬場政孝「ＭＥ革命と生産の自動化」情報問題研究集団編『コンピューター革命と現代社会3』，大月書店，1986年，57～58ページ。

(42) 北村洋基「ＭＥ化・情報化の評価をめぐって」『土地制度史学』，130号，1991年，12ページ。

(43) 山下幸男『メカトロニクス時代の労働』，新評論，1990年，204ページ。

(44) 同上書，201ページ。

(45) 伊藤秀男「オートメーションの発展と経済学（上）（下）」『経済科学』(名古屋大学) 35－2，3，1987～88年。

(46) 青水司「コンピューター革命と労働過程」情報問題研究集団，前掲書所収。